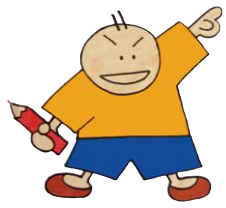
発行日　2022.5.1

生活者ネットニュース



■発行：多摩・生活者ネットワーク　■発行責任者：原田恭子　■連絡先：〒 206-0014 多摩市乞田 1227-1-112 番地
■ TEL:042-376-5758　■ FAX:042-376-8854　■ホームページ　http://www.tama-net.jp/　■ E-mail :office@tama-net.jp
155 号

いまこそ、戦争の無益さを実感して ～ロシアのウクライナ侵略に世界中がNO！

「地球は青かった」。1961年、当時のソビエト連邦が打ち上げた宇宙船から地球を見て、宇宙飛行士のユーリイ・ガガーリンが言った言葉です。宇宙から見た地球は豊かな生きものがすむ青いきれいな星です。私たちは地球の住民としての運命共同体を実感したものでした。しかし、その青い地球では未だに戦争が絶えず、存亡の危機とさえ言われています。

ロシアのウクライナ侵略に対して世界中がNO！と叫んでいます。一方ロシア国内でのプーチンの支持率は高い。なぜロシア国民は自国が国際ルールを破って、国際的に非難を浴びているということを知らないのでしょうか。多くの日本人、いや、世界中の人々は思っています。そして、実際に反対の声を上げ、カンパや救援活動に邁進している人も多いのです。

この道はかつての日本が歩んだ道

しかし、新聞の投書や各界の人々があの時の日本のようだとコメントしています。1931年9月18日、中国の柳条湖での線路爆破を発端に日本の中国東北部へのあからさまな侵略が始まったのです。国際世論に反し提灯行列までして日本中が歓喜に沸いたのでした。今の高齢者は両親や祖父母から聞いた記憶があるでしょう。

それから15年間にもわたり世界を相手に戦争が始まったのです。多くの犠牲者を出した結果、戦争は終わりました。戦争による惨たらしい現実を国民が実感したからこそ、戦争をしないことを明文化し憲法をつくり上げたのです。

昨年で30回をむかえた多摩市平和展は毎年平和の大切さを訴えている。2017年には子ども参加によるワークショップを実現させた。

一握りの武器商人だけが高笑いする

ストックホルム国際平和研究所によると、21年までの5年間での主要兵器の輸出のシェアはアメリカ1位、ロシア2位です。世界中で起こっている戦争に対して、一方で仲裁に入りながら一方で煽り立てている構造になっています。いま、まさにロシアは仲裁どころか戦争の首謀者になっています。こうした状況の中、ウクライナ侵攻が世界的な軍需産業の肥大化につながりかねません。日本の政府・自民党は防衛費を現在のGDP比1％程度から2％に引き上げようとしています。

原発は原爆と同じ～核兵器禁止条約の批准を

ロシアはウクライナの原子力発電所を占領し、原発事故が起こる危機一髪の状況でした。原発は電源が失われ、冷却水が止まれば終わりです。その脆弱さが露呈した場面でした。

そもそも、原発だけではなく核兵器も含め、核というものは持っていること自体に大きなリスクがあります。原発なら当然事故が起こることもあるし、核兵器も意図せず何かの間違いで使われてしまう場合もあります。あるいは、対峙する相手に抑止力が働かなかった場合、結果的に重大な結果をもたらしてしまうこともあります。だから核そのものを廃絶の方向に持っていかなくてはならないという発想で国連で提案されたのが、2021年に発効した核兵器禁止条約の発想です。今回のウクライナ攻撃により、そうしたリスクがよりはっきりと、現実のものとして見えてきたといえます。現在原発33基ある日本は核兵器禁止条約をいまだに批准していません。

福島原発から出た汚染水のタンク。2023年春をめどに沖合1Kmの海洋へ放出する計画だ。出典：資源エネルギー庁ウェブサイト（https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/johoteikyo/fukushima2021_02.html）

世界の一員として信頼を獲得しながら共生社会の実現を

難民をなかなか受け入れない日本でも、ウクライナからの避難民を受け入れて手厚い待遇を展開しています。これを機にアジアや中東の多くの難民も平等に受け入れるべきでしょう。研修制度で安く海外から人材を確保することも見直すべきでしょう。

日本は今人口減、そして過疎化に悩んでいる地方も世界中の人たちと暮らすことで理解し合えるチャンスです。それは世界の信頼を得ていくチャンスでもあるのです。日本に新しい可能性が見えてきます。閉塞的な社会に新しい風が吹くことに期待します。

ありの眼

知らなかった人工芝のマイクロプラスチック化

3年前に多摩東公園のテニスコートが人工芝（オムニコート）に変わり、とても嬉しかったことを思い出します。それまでの多摩東公園のテニスコートは土のコート（クレーコート）でした。体にも足にも優しく一番いいのですが、雨が降ると季節によっては2～3日、まして雪が降った時には長い間利用できません。冬は雪が降らなくてもコートの後ろの方が凍ってしまい、午後1時頃には溶け出し土がドロドロになり、何面かは使用不可になります。せっかく休みを取り晴天でもできない時はがっかりしたものです。本当に人工芝はいいなと思っていました。

でも、ラケットやシューズで削られた人工芝が、風や雨によって川や海に流され魚たちの餌になっていることを知った時はとてもショックでした。

私は今、コロナ禍で介護職ということもあり月1回、奈良原公園のコートでテニスを楽しんでいます。もちろん奈良原も人工芝です。

テニスコートの人工芝だけが環境を汚染しているわけではありませんが、とても悩ましい思いになります。

野宮和子（貝取在住）

3月議会 会派代表質問から

市議会議員 **岸田めぐみ**

気候非常事態宣言を出した市長の姿勢を問う！

プラスチックは安価で軽く、そして耐久性があるという利点があるために、今や私たちの暮らしに欠かせないものとなっています。しかしその利点である耐久性は自然界で分解されず、自然が持つ調整機能も働かないのです。つまりプラスチックは自然界に排出してはならないのです。研究によるとプラスチックは水中で劣化するときに温室効果ガスを発生させ、細かくなりマイクロプラスチックになると海中だけでなく、私たちが呼吸で取り込む空気中にも漂っていることがわかってきています。

■人口芝はマイクロプラスチックを生み出す

市のみでできる対策は限られていますが、市民も温暖化の影響を受け、気候非常事態宣言を出した市として、今が市の姿勢を市民に示し、市民と共にマイクロプラスチック問題も含めてこの緊急事態に取り組んでいく時なのです。

市内の河川においても昨年度の流出実態調査でマイクロプラスチックが採取され、採取数では人工芝が一番多いという結果が出ました。市長は計画的に改修していくために、テニスコートの貼り替えを行うと述べる一方、市民には積極的にマイクロプラスチックの啓発を行っていく必要があるとも述べています。

■市民とともに考える機会に

市長はこれから勉強するとした上で、対策を練っていきたいとの答弁がありました。公園の人工芝だけが問題の全てではなく、またすぐに解決策を見いだせる問題でもありませんが、未来の多摩市を考えると市の姿勢を見せるのは今であり、テニスコートの改修は市民とこの問題を考える機会であると考えます。

3月議会 一般質問より

市議会議員 **岩崎みなこ**

子どもの権利保障は多方面に配慮を！

多摩市は今年4月、子ども・若者の権利保障の条例を制定しました。条例を制定した以上、権利が守られる環境づくりは不可欠です。これまでの固定観念を変える必要があるからです。にもかかわらず新年度予算には、市民に分かりやすく知らせる条例の具現化としての予算はありませんでした。

■学校で学ぶ機会を！

権利意識、権利の主体、自己肯定感とはどういうことか、就学前や小学校の時期に分かりやすく知っておくことは、子ども期とその後の長い人生において大変重要です。そのためにも品川区が実施しているCAPのプログラムなども重要なツールです。

■様々な施策の検証を

一方、市は、ある地域の全ての公園を一斉に改修しました。2年程度その地域のどの公園でも子どもたちは遊ぶ権利を奪われました。配慮ある改修を考えるべきでした。

又、学校給食で牛乳はほぼ毎回提供されますが、10％強の牛乳を廃棄しています。飲める、飲めないに限らず、このことに苦痛を感じる子どもはいます。子どもたちと共に、別のカルシウム摂取方法や食品ロスについて考え、取り組むべきです。

■「しつけ」が理由も体罰はダメ

さて、今まで親などが、子どもに対し、多少怒鳴る、叩くことがあったとしても「しつけ」であれば仕方がないとみなしていた民法の懲戒権が削除される方向です。しかし、法が変わっても、社会の常識、私たちおとなが変わり、子どもが何か失敗したとしても、叩かれたり、怒鳴られたり、される権利は無いことを、親や子どもに伝えていかなければなりません。子ども・若者の権利保障の条例を市民すべてに周知することが第一歩です。

学校給食の牛乳を考える 食品ロスの視点で

4月9日、生活クラブ運動グループ多摩市地域協議会主催の「学校給食の牛乳を考える」イベントに参加した。

司会の山口さんからは、多摩市の学校給食では昨年115,431本（2020年6月～2021年1月・8か月間）の牛乳が棄てられていた。これは提供された牛乳の約11%にあたる。アレルギーのある子は診断書を提出すると停止されるが、苦手だったりして飲めない子には、毎日牛乳が出される。世界がSDGsをめざす今日、こんなもったいないことはない。実施したアンケートにも、もったいないからどうにかしないといけないという親の声が大多数で、牛乳の選択制も考える必要がある。という報告があった。

管理栄養士の資格を持つ岸田めぐみ議員からは、給食を提供する側から言うと、牛乳は経済的にも栄養バランス的にも優れた食品なので、定められた基準のカルシウムを摂取するには牛乳なしで考えるのは悩ましいとのこと。

松本さんからは、余剰牛乳を他の食品に加工するといっても、一度冷蔵庫から出て適温ではない状況に置かれた牛乳は、使用することができない。廃棄するしかない。また、他の食品でも寄付側が全量を提供したいが、団体が一部しか引き取れないことがわかると全量が廃棄された。など、もったいない話が多く出た。

近藤さんからは、牛乳や食肉のバックグラウンドに関する資料が出された。家畜の飼料、それを育てるための土壌や水、運ぶための燃料。食品を捨てるということはそれらすべてを捨てることになるという話。また、普通の牛の寿命は約15年くらいだが、乳牛は狭いところに閉じ込められ、妊娠と出産、搾乳を繰り返して5～6年で肉にされるという。

すべての食べ物の奥には長い長い道のりと命がある。大切に食べたい。　（O. A）

パネリストのみなさん。左から山口圭子さん（子育て支援 そらいろのたね代表）、岸田めぐみ議員、松本靖子さん（NPO法人シェア・マインド代表）、近藤恵津子さん（NPO法人コミュニティスクール・まちデザイン理事長）

今さら聞けない!? 出し方を守らないと危険

2022年4月にゴミ収集車の火災が発生しました。「燃やせないごみ」の中にスプレー缶、カセット式ガスボンベ、ライター、乾電池、モバイルバッテリー等はいれてはいけません。

多摩市気候非常事態宣言を重く受け止め 2022年度予算修正案を提出

連光寺公園・貝取北公園テニスコートの人工芝への貼り替えに対し生活者ネットは「フェアな市政」の会派と共に修正案を出しました。本予算は施政方針を具現化する指標です。

施政方針では、まずは気候変動問題に取り組むと掲げています。にも関わらず、このタイミングでアクセルとブレーキを同時に踏むような人工芝の貼り替えに予算を付けたことについては、一旦立ち止まることが必要と感じました。特に行政の仕事は先例を踏襲しがちです。妥協すれば今後も現状に甘んじていきます。

健幸都市の多摩市において高齢者の足腰の負担を考えれば人工芝のコートはやむを得ないのでは、という質問もありました。しかしどちらを優先するか考える時、「市と議会共同で気候非常事態宣言」を出したことは大変重いのです。

また、多摩市気候非常事態宣言では、「生物多様性が豊かであれば気候変動による影響を緩和しもとの自然環境に戻してくれる調整機能を持ちます。」と、生物多様性の保全の必要性にも言及しています。二酸化炭素を排出しない社会の実現を最優先に、広い視野で全ての施策を推進する姿勢が問われているのです。

（岩崎みなこ）